

研究分野	資源生態	部名	漁場環境部
研究課題名	いか類漁場調査		
予算区分	県単		
試験研究実施年度・研究期間	S.52 ～ H.18		
担当	清藤 真樹		
協力・分担関係	(独) 日本海区水産研究所、北海道区水産研究所		

<目的>

今年度はスルメイカの魚体が小さいという現状にあった。そこで実際にどのレベルであったのか、銘柄別水揚げ結果からの各平均重量の推定を行った。

<試験研究方法>

県漁連日報による銘柄別水揚げ箱数から、各月の1尾当たりの平均重量を推定した。期間は平成7年度から平成17年度で、銘柄別水揚げ数量がはっきりした日及び漁港のデータを抽出し、5kg/箱とした。尚、過去の測定結果等からバライカは80尾/箱/10kgとして計算した。

<結果の概要・要約>

イ) 太平洋海域

太平洋海域は尻労、白糠、泊、三沢を対象港とし、最大水揚げ港である八戸は銘柄が不明のため用いなかった。

太平洋沿岸域は、ほぼロジスティック曲線的に増加していることから冬生まれ群を主とした単一群を利用していることが示唆されるが、平成7年度のように7月から8月にかけて変化が少ないのは7月にかなりの割合で日本海側からの秋生まれ群の回遊があったものと推察される。また、各漁期では漁初期と漁終期に重量がばらつき、10月にかなり狭い範囲に集中する傾向が見られた。また、今年度は9月までかなり低い値で推移し、回遊と成長の遅れが見られた。

ロ) 津軽海峡海域

津軽海峡海域は三厩、佐井、下風呂、大畑、野牛、岩屋、尻屋を対象港とした。

同海域においてもほぼロジスティック曲線的に増加していることから冬生まれ群を主とした単一群を利用していることが示唆され、漁初期及び漁終期の重量がばらつきも太平洋海域と同様であった。また、今年度は9月までかなり低い値で推移し、回遊と成長の遅れが見られた。

ハ) 日本海海域

日本海海域は小泊、下前、鰯ヶ沢、大戸瀬、深浦を対象港とした。

日本海沿岸域は、他の2海域とは異なりロジスティック曲線的な動きをしていない。これは、操業時のパンチング結果にも見られることだが、異なる発生群を利用していることに起因するものと考えられる。今年度は単一の群を利用している太平洋に比べて、発生 of 早い秋生まれを利用していることで若干相殺されているものの期間を通じて低い値で推移し、冬生まれ群の成長の遅れが見られたものと考えられる。

＜主要成果の具体的データ＞

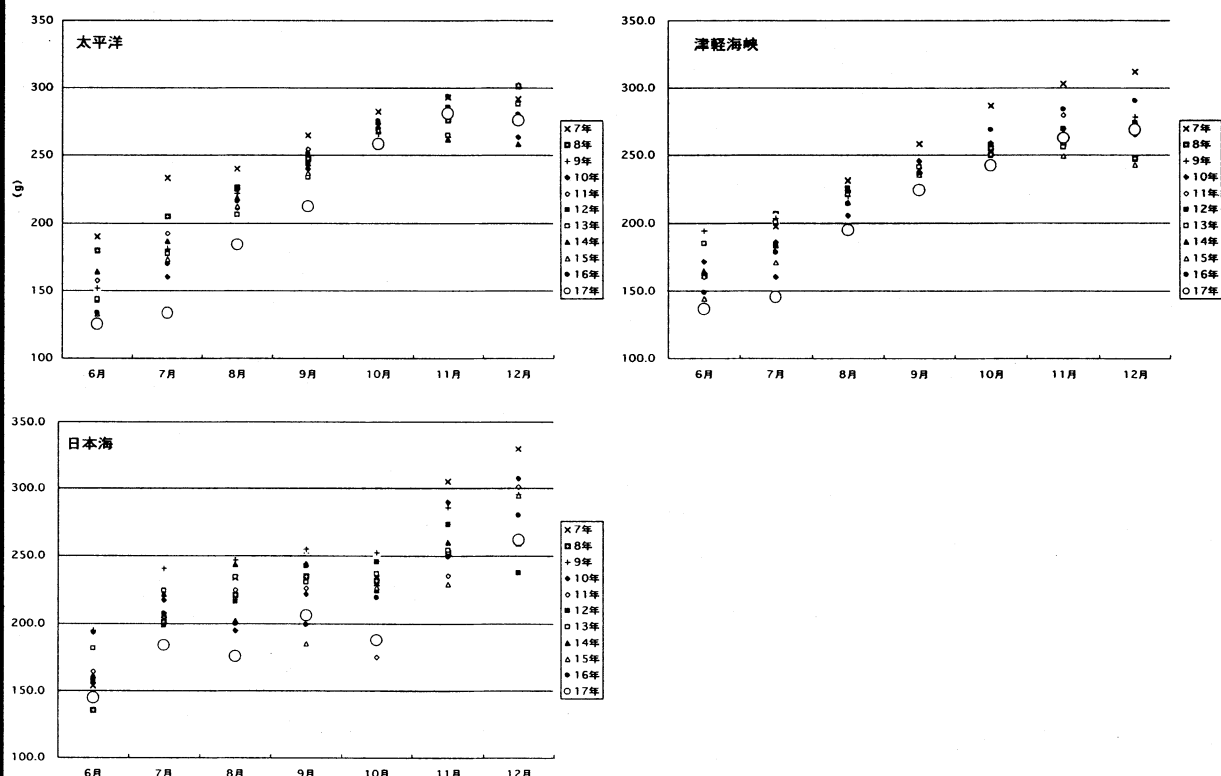


図 各海域における推定平均重量

＜今後の問題点＞

平成7年度から平成17年度という短期間であるが、各海域の成長の傾向が毎年同じような動きをすることは興味深いことである。

また、近年、冬生まれ群の産卵場の環境の変化から主産卵期が遅れているということも言われはじめ、回遊の遅れは水温上昇が遅れたことによるにしても、成長の遅れはその説を推察させるものであると考えられる。

今後は、最大の問題であるバラ銘柄の尾数、大きさ等のデータを蓄積して正確なデータとしていく必要がある。また、成長が各年で異なる原因についても他機関と協力して解明する必要がある。

＜次年度の具体的計画＞

これまで、バラ銘柄は時期によって最多銘柄であるにも関わらず、ほとんど測定されていないため、正確なデータはつかめていない。この部分を正確な値に近づけることができれば、漁獲尾数の特定が可能となり、さらに正確な漁場形成状況がつかめるはずである。そこで、バラ銘柄の測定、データの蓄積を行っていきたい。

＜結果の発表・活用状況など＞

平成17年度イカ釣り漁場開発調査資料31号